エドマンド・ウィルソンにおける〈民族〉―
F・スコット・フィッツジェラルドのアイルランド性をめぐって

千代田夏夫*

（2022 年 11 月 16 日　受理）

Edmund Wilson's "Nation" and F. Scott Fitzgerald's Irishness

CHIYODA Natsuo*

要約

エドマンド・ウィルソン（Edmund Wilson, 1895-1972）は 20 世紀を代表する米国文学批評家であるが、その考察対象は文学に留まらず広く社会現象にまで及んだ。本稿ではネイティヴ・アメリカンやフランス系カナダ人の民族性、そこから生じる民族問題に対して〈リベラル〉な態度で臨んだ彼が、アイルランド性という特定の民族性に関する限り、特に F・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald, 1896-1940）のそれに対して通俗的ステレオタイプを用いて否定的言辞を連ねることに注目し、その原因を〈ロスト・ジェネレーション〉作家の同輩にしてプリンストン大学の一期先輩として常に〈師〉としての座を構えつつ、〈ロスト・ジェネレーション〉作家の同輩たる創作者としてはその後塵を拝し続けたフィッツジェラルドへの愛憎半ばする関係に探る試みである。

キーワード：エドマンド・ウィルソン、F・スコット・フィッツジェラルド、アイルランド性、民族

はじめに

本稿ではエドマンド・ウィルソン（Edmund Wilson, 1895-1972）における〈民族〉という視座からその著作を俯瞰したい。文明批評のポーションが多くなる後期の著作にかかるにつれ、〈民族運動〉により比重がかかってゆく。1956 年『直言―六十歳での省察』[1]（*A Piece of My Mind: Reflections at Sixty*, 1956）に示される第二次大戦後のアイルランド語公用語化への反対、1960 年『イロクォイ族へ

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

の謝罪』（*Apologies to the Iroquois,* 1960）において親身に描かれるネイティヴ・アメリカンの民族主義運動などである。死後にノートと日記がまとめられた『一九四〇年代―その時代のメモと日記から』（*The Forties: From Notebooks and Diaries of the Period*, 1983）でも、「敗北を喫した、あるいは非友好的勢力の抑圧と戦っている民族（people）」として「アイルランド、ロシア、1870 年以降のフランス、アメリカ南部」をあげ、敗北ないし抑圧経験が、その民族の文学にとっては有益であろうことを説く。その上でウィルソンは、「民族運動（nationalist movement）」（*Iroquois* 61）が権力を握った果てに行き着く〈ナショナリズム〉には警鐘を鳴らす。

1．民族主義運動へのまなざし

『直言』中「ヨーロッパ」の章を見てみよう。第二次世界大戦後のアイルランドにおける、「滅びつつあるか少数の民族によってしか学ばれない」（*A Piece of Mind* 55）、ジョイスやショーの高みには至りえない「民族言語（folk-language）」（55）たるゲール語の公用語化についての議論である。「自身の言語（native tongue）」が排斥され「圧制者の言語（oppressor's language）」（55）を強要されたアイルランド人の憤りには共感しつつ、すでに「より広い使用（wide currency）」を得ている英語を排してまで衰退言語たるゲール語の、イデオロギー先行的な公用語化には、反対するのである。同章では、戦禍から立ち直るための「自助努力をしない」ヨーロッパの、「誤ったナショナリズム（wrong-headed nationalism）」たる「断片化（fragmentation）」（57）傾向の一例としてアイルランド語公用化が非難される。ここで対比されるアメリカの「可能な限り一緒にやってゆく」、「メルティング・ポット（melting pot）」が「我々のスローガン」（57）であるとするウィルソンには、今日的視座から見れば限界も見えるかもしれない。『イロクォイ族への謝罪』においては、二つの世界大戦を「白人の大戦争（big white wars）」（90）と地の文で記す相対性もウィルソンは得ている。

1965 年の『おおカナダ―カナダ文化についての或るアメリカ人のメモ』（*O Canada: An American's Notes on Canadian Culture*, 1965）では「フレンチカナダの生活が締め付けられ、欲求不満に満ちていることを小説や他の文物で充分に見た」（179）のちに、ケベック州で独裁的支配を振るったモーリス・デュプレシ（Maurice Duplessis, 1890-1959）の死後「新局面に入ったカナダの民族運動（nationalist movement）」（185）に目を配る。完全な独立を目指すマルセル・シャピュ（Marcel Chaput, 1918-91）（217）等にも紙幅を割きつつ、同時に「ナショナリズムはそれ自体危険なものである。右翼左翼に関わらず、それが権力の毒にすばやく変化することを我々はロシアでもドイツでも見てきている」と述べるウィルソンは、当時のカナダ民族運動にすでに「王権神授（a divinely appointed authority）」（222）的権威付けをかぎとっている。

なおウィルソンと〈民族〉というテーマにおいては、アフリカ系アメリカ人文学への〈無視〉は看過できない。1931 年の第一評論集『アクセルの城』（*Axel's Castle: A Study in the Imaginative Literature of 1870-1930*, 1931）でも一章を割いたガートルード・スタイン（Gertrude Stein, 1874-1946）の代理人であり、1920 年 30 年代マンハッタン・ハーレム地区を中心としたアフリカ系アメリカ人作家たち

による文芸運動ハーレム・ルネサンス、その有力な支持者でもあった白人作家・写真家のカール・ヴァン・ヴェクテン（Carl Van Vechten, 1880-1964）との交友および彼の初期作品への批評は確認できるものの、ハーレム・ルネサンス勃興期と同時期にマンハッタンに住み文芸批評を行いながら、「アフリカ系アメリカ文学には何も言っていないに等しく」、モダニズムを論じながら「ハーレム・ルネサンスを完全に無視する」（Cain 484）のであり、ひいては黒人作家を文芸批評家としては無視するのである (478)[2]。しかしながら『アクセル』最終章の記述には留意しておきたい。ここでは「ハーレムのキャバレー」を訪れる「白人ニューヨーカーたち」と彼らが目にする「アメリカのビジネススーツに身を包み、恭順かつ悲し気に西洋文明の要請に順応しようとしている黒人たち」（839）の姿を通して、〈辺境〉に放浪する、現代のランボー的作家たちの限界が皮肉に描かれる。

2. フィッツジェラルドのアイルランド性

文学に留まらない多種多様な対象に幾多の批評を残した〈リベラル〉なウィルソンにあって、キャリアの初期から晩年まで、ある民族に対する既存の通俗的ステレオタイプに則って否定的な言辞を連ねたという点で、一歳年下のF・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald, 1896-1940）に対して発動される〈アイルランド性〉の事例は異様であると言えよう。なお本稿でアイルランド性と呼ぶのは、東部エスタブリッシュメントたるウィルソンから見た、アイルランド系アメリカ人としてのそれとしたい。本国アイルランドのアイルランド人あるいはウィリアム・バトラー・イェイツ（William Butler Yeats, 1865-1939）ジェイムズ・ジョイス（James Joyce, 1882-1941）等のコスモポリタン的アイルランド人に対してそのようなステレオタイプが適用されることはない。

プリンストン大学の一学年上として出会ったときから生涯の友人にして「弟子（mentee）」（Dabney 49; Berman 29）であり、「弟のような」（*Forties* xv）存在であり、「生涯にわたる父親のような後見役」（James 157）を果たしたウィルソンは、フィッツジェラルドが「もっともひどい降下の最中にある時も理解し心を寄せ」「死後もその思い出を守った」（Wain 157）のであった。そして未完の長編を編集した『ラスト・タイクーン』（*The Last Tycoon*, 1941）、自伝的作品やノートをまとめた『崩壊』（*The Crack-Up*, 1945）という、２つの遺作の編集と刊行をつうじて「ほとんど一人でフィッツジェラルドの40年代における名声復活」（Macdonald 157）までも成し遂げたのであった。

ウィルソンのごく初期のエッセイ、1922年に雑誌『ブックマン』（*The Bookman*）に掲載された「F・スコット・フィッツジェラルド」（“F. Scott Fitzgerald,” 1922）は「フィッツジェラルドの名声を実質的に確立した」（Schlacks 160）批評であり、今日までフィッツジェラルド研究においてたびたび参照される。代表作1925年の『グレート・ギャツビー』（*The Great Gatsby*, 1925）上梓前の、デビューしてまだ2年ほどのフィッツジェラルドを論じながら、その神髄をすでに看破している。なおこのエッセイは1922年初出および1924年の単行本所収時には署名なしの匿名記事であったが、少なくともフィッツジェラルドは出版前から事情を知っていた。

本エッセイでは、フィッツジェラルド作品に影響を与えた二つの要因として、第一に彼が「中西

部（the Middle West））出身であること、第二に「部分的にアイルランド人（partly Irish）」でありそのことが「非アングロ・サクソン的な（not Anglo-Saxon）ある種の資質を作家の人生・作品双方にもたらしている」（“F. Scott Fitzgerald” in *The Shores of Light* 33）ことが述べられる。とくに「アイルランド人らしく、ロマンティックでありながらロマンスに対してシニカルでもある」という箇所はフィッツジェラルドの作風の特徴「ダブル・ヴィジョン」を説明するものとしてしばしば引かれる。このダブル・ヴィジョンという語はやはり同世代、1898 年生まれの批評家マルカム・カウリー（Malcolm Cowley, 1898-1989）によって用いられたのが最初とされる[3]。

ここでウィルソンがフィッツジェラルド理解の要諦の第二に挙げる〈アイルランド系〉の血筋の記述に関して『ブックマン』掲載の初出から 1924 年の単行本『文学的スポットライト』（*The Literary Spotlight*, 1924, pref. John Farrar）再録、1952 年の『光の岸辺』（*The Shores of Light: A Literary Chronicle of the Twenties and Thirties*, 1952）再再録までの変遷を検証したデボラ・デイヴィス・シュラックス（Deborah Davis Schlacks）の論考を見てみたい。

実際には母方のみアイルランド系であるフィッツジェラルドは 1922 年の記事の草稿にクレームを入れる。しかしウィルソンはそのまま「両親ともにアイルランド系である（Irish on both sides）」（“F. Scott Fitzgerald” in *The Bookman* 23）との記述を 1922 年『ブックマン』誌上に掲載する。その記事が刊行後にまとめられた 1924 年版では「一部分はアイルランド人（part Irish）」（“F. Scott Fitzgerald” in *The Literary Spotlight Shores of Light* 130）に修正し、フィッツジェラルドの死後 10 年以上を経た 1952 年『光の岸辺』収録版でようやく、「部分的にアイルランド系（partly Irish）」（“F. Scott Fitzgerald” in *The Shores of Light* 30-31）とする。同時に重要なのはシュラックスの指摘する「父方のアングロサクソン系にはどの版でも言及しないこと」(Schlacks 161)である。

そして同エッセイでは、ウィルソンが、中西部出身、アイルランド系の血筋につづいてフィッツジェラルドを理解する第三の要素として執筆を想定していた〈飲酒癖〉―これはフィッツジェラルドの嘆願によって削除された―が、ジョージ・バーナード・ショー（George Bernard Shaw, 1856-1950）の喜劇『ジョン・ブルともう一つの島』（*John Bull's Other Island*, 1904）からの引用「アイルランド人の想像力はその者から決して離れず、あまりにも苦しめるのでウィスキーなしではやってゆかれないのである」（“F. Scott Fitzgerald” in *The Shores of Light* 33）によって示される。

同エッセイに見られる「子どもっぽさ」「世情の疎さ」「女性のように、抽象的・非個人的思考が出来ない」（33）というフィッツジェラルドに対しての記述は、「子どもっぽさと未成熟、抽象思考の欠如、強い想像力とロマンティシズム、リリシズム、恨みがましさ、軽薄さ、まじめさの欠如」ショー経由で「飲酒」（Schlacks 168）といった当時のステレオタイプ的アイルランド性認識に則ったものであり、フィッツジェラルドが「アイルランド系アメリカ人（*Irish*-American）なので」（強調原文）、「フィッツジェラルドは実際には、完全なアメリカ作家ではない」、その作品は「本格芸術（serious art）ではない」（Schlacks 169）というウィルソンの意思表示をシュラックスは読み取ってゆく。なお 1922 年版、24 年版、52 年版とアイルランド系の前の語を both, part, partly と弱めていっ

たウィルソンだが、52 年版で強めたアイルランド性もある。「ことばを虹色の何かに変えてしまう才能（a gift for turning language into something iridescent）」、これを「アイルランド的才能（Irish gift ）」（*The Shores of Light* 33）と言い換え、アイルランド性をここでは肯定的に強調している（Schlacks 175）。

「アイルランド系アメリカ人に対して当時は普通であった」ステレオタイプが充溢する本エッセイにウィルソンの「フィッツジェラルドのアイルランド性の、否定的な提示方法」（Schlacks 175）が確認できる。同エッセイに関してダブニーが指摘する、ウィルソンが「第一次世界大戦後の享楽主義的反抗精神（the pleasure-seeking rebellion）」を、フィッツジェラルドの「アイルランド的ロマンティシズムとシニシズム」結びつけた点―ダブニーはここに「テーヌの時代、人種、環境というカテゴリ」（Dabney 93）の受容を見る―も同根のものであろう[4]。

死後にまとめられた『一九二〇年代―その時代のメモと日記から』（*The Twenties: From Notebooks and Diaries of the Period* , 1975）では作家の最大長編『夜はやさし』（*Tender Is the Night*, 1934）のモデルともなる、画家にしてソーシアライト、バーマンの研究ではウィルソン、メンケンと並ぶフィッツジェラルドのメンターと見なされるジェラルド・マーフィ（Gerald Murphy, 1888-1964）についての記述がみられる。「アイリッシュ・カソリックである、つまりニューヨークの『最上流階級』出身ではない」マーフィと「スコットとはともにアイリッシュ・カソリックであるという共通点を有しており」、「半ば疎外されたバックグラウンド（semi-excluded background）を有する者同士として」スコットがマーフィと知己を得たことは「夢がかなったようなもの」と記す。「魅惑的で好みにうるさくて、楽しくて繊細で、ファンタジーの才のある」マーフィは、「スコットのなりたい人物像である」（79）と記す筆致には、やはりアイルランド系アメリカ人のステレオタイプの否定的な適用が確認される。

ウィルソンがアイルランド性に帰したがる、フィッツジェラルドの酒癖については 1949 年の日記でも、ある法律家の「法的無節操（legal unscrupulousness）」を「カソリックであるということの心理」すなわち「『汚いアイルランド的トリック』（“dirty Irish trick”）」（*Forties* 304）によるものとし、当時すでに死去して 10 年近く経っているフィッツジェラルドまでを引き合いに出す。

フィッツジェラルドの死後、未完の長編『ラスト・タイクーン』を編集して 1941 年 10 月に出版し、エッセイ・ノート・書簡集『崩壊』（*The Crack-Up*, 1945）の出版に向けて動いていた 1943 年に出された「書誌が出来て思うこと」（“Thoughts on Bibliographed,” 1943）（『古典と大衆文学――一九四〇年代文学記』（*Classics and Commercials: A Literary Chronicle of the Forties*, 1950 所収）の中の記述では、若き日のフィッツジェラルドの「今までで一番すごい作家になりたい」という無邪気な志を、「馬鹿げた」「ファンタジー」と突き放した過去を回顧しつつ、その才能、「酔ったような意気込み（intoxicated ardor）」（561）に賛辞を惜しまないウィルソンの、フィッツジェラルドへの敬愛があふれている。その上で、本稿で見てきたウィルソンらしからぬ通俗的なアイルランド・ステレオタイプに則った言辞は、やはり抜き差しならぬ関係のフィッツジェラルドへの愛憎半ばする感情に起因

するものではないか。1925 年生まれの米国作家ゴア・ヴィダル（Gore Vidal, 1925-2012）は、ウィルソンをまず「フィッツジェラルドの友達」（French 29）として知ったと述べ、『崩壊』の編集作業を賞賛するが、ウィルソン自身小説や詩、劇作を著して世に問うていながら、創作者としては到底かなわないという劣等感と、「メンター」としての知的優越とのせめぎ合いに苦しんだことは想像に難くない。アイルランド系作家が繰り広げる自身が持ちえない創作力―桁外れの想像力―を、そのアイルランド性あるいはそのステレオタイプに帰して自らの創作の才の限界を慰めることしかできなかった一種のウィルソンの悲哀を我々は見るのではないか。先に見た 1922 年のエッセイを別とすれば、ダグラスはウィルソンが「まとまった文章をひとつも公的には出していない」（Douglas 24）三名に、フィッツジェラルドに加え、H・L・メンケン（H. L. Mencken, 1880-1956）とエドナ・ミレイ（Edna St. Vincent Millay, 1892-1950）を挙げるが、前者はウィルソンが師と仰ぎ後者は恋人関係にあった作家である。

3．ヘンリー・ジェイムズのアイルランド性

最後に、フィッツジェラルドに次いでウィルソンがアイルランド性をことさらに言い立てるのはヘンリー・ジェイムズ（Henry James, 1843-1916）に対してであることを述べておきたい。一般的に東部エスタブリッシュメントのイメージが強いジェイムズに対するアイルランド系の出自の言及は執拗である。『三重の思考者―十の文学論』（*The Triple Thinkers: Ten Essays on Literature*, 1938）所収の「ヘンリー・ジェイムズの曖昧性」（"The Ambiguity of Henry James," 1934）ではジェイムズ一家は「アイルランド人とスコットランド系アイルランド人の系統である（Irish and Scotch-Irish stock）」（106）「ジェイムズ家自身がほとんど生粋のアイルランド人（nearly pure Irish）であった」「ジェイムズの祖父がアイルランドからアメリカにやってきて 300 万ドルの財産を築いた」（118-19）等々の記述を続ける[5]。

『愛国の血糊―南北戦争文学の研究』（*Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War*, 1962）では、「アメリカ散文」の章におけるジェイムズ評「アイルランド的抒情性の雄弁（his lyric Irish eloquence）」（665）に皮肉な響きが見られるし、「ジョン・W・ド・フォレスト」の章にも、ジェイムズがアイルランド系であるという記述がある。「ウェンデル判事」の章における、オリヴァー・ウェンデル・ホームズ（Oliver Wendel Holmes, 1841-1935）の言として示される、「ヘンリーの場合はアングロ・サクソン人と比較して育ちが悪い」「ウィリアムの場合は活発で雄弁であるけれども彼の言うことは真剣に受け止めることはできない」（784）という記述は目を引く。『直言』中の「合衆国」という章でも、ジェイムズ兄弟に対するホームズの態度に、「最近アメリカに帰化したばかりのアイルランド人（the more recently Americanized Irish）に見せる慇懃無礼」（28）を見ている。同じくホームズに仮託して語られる「アイルランド人は才能があっても厳しさ（rigor）に欠ける」（*Patriotic Gore* 786）との記述は、すでに見た 40 年前のフィッツジェラルド評に見られるアイルランド性と繋がっているようである。

結論

〈民族〉への意識はウィルソンのキャリアを通じて大きな位置を占めている。しかし彼の言及するアイルランド性は、そのフィッツジェラルド観において同時代ほぼ同年齢のロスト・ジェネレーションの創作者としての劣等に根差す、当時のステレオタイプに則った否定的言辞となる。生涯通じて実に様々な論考・文脈で引き合いに出す45歳年上のアイルランド人劇作家ジョージ・バーナード・ショーにおいてはジャーナリストの先達としての尊敬はあちこちに記しつつも、そのアイルランド性に帰属させての蔑視は見られない。ウィルソンに幼稚なまでの〈ほころび〉を露呈させるアイルランド性への態度は、逆説的に、フィッツジェラルドの存在の大きさを示すもの、そしてロスト・ジェネレーション〈作家〉の一員としてのウィルソンの生々しい姿を示すと言えるのではないか。

＊ウィルソンのテクストからの引用の訳は適宜中村紘一訳を参照した。

＊＊

本稿は日本比較文学会第84回全国大会ワークショップI「エドマンド・ウィルソンとその時代―批評の射程―」（2022年6月4日オンライン開催）で行った発表に加筆修正を行ったものである。
同ワークショップの準備段階および壇上において多くのご教示を賜った井上健（司会）、小倉康寛（報告）、塩谷昌弘（同）各氏に深く感謝申し上げる。

注

[1] “give a person a piece of mind”で「直言する」の謂であるという中村紘一氏の解説に従って本稿ではこのように訳す（『エドマンド・ウィルソン批評集1 社会・文明』423）。
[2] 後年ジェイムズ・ボールドウィン（James Baldwin, 1924-87）のことは評価している。
[3] Cowley 149-50
[4]ワークショップにおいてもウィルソンにおけるイポリット・テーヌ（1828-1893）の影響を井上氏、小倉氏が言及された。
[5]この文章は「ニューイングランドのローカルな結びつきは有さず、常により大きな外側の世界からボストンに来て、その視座は客観的であり、しばしばとてもアイロニカルであ」り、この批判的視座が『ボストンの人々』（*The Bostonians*, 1886）の失敗の原因であるとの見立てに続く。なお1948年時点での追記で、「英語を話す世界（English-speaking world）」におけるジェイムズへの「熱狂的傾倒」の要因に、アメリカの第二次大戦参戦による「国家的プロパガンダ運動（national propaganda movement）」（132）にジェイムズが「喧伝されている（publicized）」（132）という冷ややかな分析も行っている。総じてジェイムズは「第一級の作家」（124）であると述べるが、民族的出自に絡めた底意地の悪さは覆いようもない。

引用文献

Berman, Ronald. *Fitzgerald's Mentors: Edmund Wilson, H. L. Mencken, and Gerald Murphy*. U of Alabama P, 2012.

Cain, William E. "Literary Criticism." *The Cambridge History of American Literature: Volume 5, Poetry and Criticism, 1900-1950*, edited by Sacvan Bercovitch, Cambridge UP, 2003, pp. 343-575.

Cowley, Malcom. "Third Act and Epilogue." *F. Scott Fitzgerald: The Man and His Work*, edited by Alfred Kazin, 1951. Collier Books, 1964, pp. 147-54.

Dabney, Lewis, M. *Edmund Wilson: A Life in Literature*. Johns Hopkins UP, 2005.

Douglas, George H. *Edmund Wilson's America*. UP of Kentucky, 1983.

French, Philip. *Three Honest Men: Edmund Wilson, F. R. Leavis, Lionel Trilling: A Critical Mosaic*. Carcanet New P, 1980.

James, Clive. "The Poetry of Edmund Wilson." An Edmund Wilson: Celebration, edited by John Cain, Phaidon, 1978, pp.151-62.

Macdonald, Michael C. D. "The Admirable Minotaur of Money Hill." *Edmund Wilson: Centennial Reflections*, edited by Lewis M. Dabney, Princeton UP, 1997, pp. 154-68.

Schlacks, Deborah Davis. "F. Scott Fitzgerald, Trickster: Images of Irishness in Edmund Wilson's *Bookman* Essay." *The F. Scott Fitzgerald Review*, vol. 14, 2016, pp. 159-80.

Wilson, Edmund. *A Piece of My Mind: Reflections at Sixty*. Farrar, Straus and Giroux, 1956.

---. *Apologies to the Iroquois*.1959・60？. Syracuse UP, 1992.

---. *Axel's Castle: A Study in the Imaginative Literature of1870-1930*, 1931. Rpt. in Wilson, *Literary Essays and Reviews of the 1920s & 30s*, edited by Lewis M. Dabney. Library of America, 2007, pp. 641-854.

---. "F. Scott Fitzgerald." *Bookman* Mar. 1922, pp. 20-25.

---. "F. Scott Fitzgerald." *The Literary Spotlight*, 1924. Books for Libraries P, 1970, pp. 125-34.

---. "F. Scott Fitzgerald." *The Shore of Light: A Literary Chronicle of the Twenties and Thirties*. 1952. Rpt. in Wilson, *Literary Essays and Reviews of the 1920s & 30s*, edited by Lewis M. Dabney. Library of America, 2007, pp. 30-36.

---. "The Ambiguity of Henry James." *The Triple Thinkers: Ten Essays on Literature*, 1938. Rpt. in Wilson, *Literary Essays and Reviews of the 1930s & 40s*, edited by Lewis M. Dabney. Library of America, 2007, pp. 90-133.

---. "Thoughts on Bibliographed." *Classics and Commercials: A Literary Chronicle of the Forties*, 1950. Rpt. in Wilson, *Literary Essays and Reviews of the 1930s & 40s*, edited by Lewis M. Dabney. Library of America, 2007, pp. 557-69.

---. *O Canada: An American's Notes on Canadian Culture*. Farrar, Straus and Giroux, 1965.

---. *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War*. 1962. Northeastern UP, 1984.

---. "The Ambiguity of Henry James." *The Triple Thinkers: Ten Essays on Literature*, 1938. Rpt. in Wilson, *Literary Essays and Reviews of the 1930s & 40s*, edited by Lewis M. Dabney. Library of America, 2007, pp. 90-133.

---. *The Forties: From Notebooks and Diaries of the Period*, edited by Leon Edel, 1983. Farrar, Straus and Giroux, 1984.

---. *The Twenties: From Notebooks and Diaries of the Period*, edited by Leon Edel, 1975. Farrar, Straus and Giroux, 1976.

ウィルソン、エドマンド『愛国の血糊　南北戦争の記録とアメリカの精神』中村紘一訳、研究社出版、1998 年。

…『エドマンド・ウィルソン批評集 1　社会・文明』中村紘一・佐々木徹訳、みすず書房、2005 年。